

手触りの一冊

NAKANO, Hisamatsu / 中野, 久松

(出版者 / Publisher)

法政大学小金井論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学小金井論集 / 法政大学小金井論集

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

3

(発行年 / Year)

2016-03-31

手触りの一冊

中野久松

小金井論集は2004年に創刊されました。以来、理系とは異なる研究成果が数多く本論集に掲載されてきました。創刊に携わった者として、小金井論集がこれからも私たちの『知』を刺激する情報源であり続けること、そのことを強く願っております。

現在は、ITの進展により、情報を容易に発信できるようになっています。学会の多くは論文の掲載を従来の紙媒体から電子媒体へと移行しつつあります。この現状から、将来、紙媒体による掲載が少なくなると予見されます。これは、『知』の保存場所が「書棚」から「コンピュータの中」に変わることを意味します。

それだけではありません。電子媒体は、紙媒体以上に多くの読者を、容易に、スピーディにとり込むことを可能にしています。国内にとどまらず、電子媒体の論文は、瞬時に世界の研究者にとどき、論文内容に対する反応を加速化しています。速報性を重要視する研究者にあっては、研究成果を電子媒体の論文として投稿することが一般的になりつつあります。

論文は読まれてはじめて意味をもちます。読まれない論文は自己満足で終わってしまいます。「自分の論文がどこの国の誰に読まれたか？」を知り得るウェブサイトがいくつか立ち上がっています。その結果、これらの情報が論文執筆者にわかるようになり、さらには、他の研究者に引用された回数や、どれだけ他の研究者に影響を与えたかが視覚化されるようになりました。

思いおこすと、私の最初の論文掲載は紙媒体でした。まだ電子媒体のない40年以上も前のことです。当時、私は大学院生。ワープロもない時代であって、論文はすべて手書きでした。最初の論文は郵送による投稿ではなく手渡し投稿としたことを覚えています——東京タワーの近くにあった学会事務所に赴き、直接、

担当者に手渡しました。手渡しにしたのは、学会事務所とはどんな場所なのかという単純な好奇心と、それに加えて、論文投稿から掲載されるまでにかかる時間の短縮のためでした。

「法政大からの初めての投稿です、今後も積極的に投稿してください」。手渡しをしている私に、部屋の奥から出てこられた事務部長さんが言葉をかけてくださいました。あの時の事務部長さんの日に焼けた顔が印象に残っています。後でわかったのですが、事務部長さんは本学のOBでした。この論文は規則に従って査読にまわされ、正確に思い出せませんが、3か月後ぐらいに採録決定となり、その年の12月の学会誌に掲載されました。投稿から掲載まで5か月かかっていました。これで研究者としての第1歩をふみだせたと、少しの間、それまでに経験したことのない充実感をもつことができました。皆様も、最初の論文が掲載された時、紙媒体であろうと電子媒体であろうと、私と同じような経験をされたのではないのでしょうか。

40年も前のころ、国際シンポジウムは少なく、開催地は主として米国と欧州でした。自分自身の研究発表に加え、研究の最先端を走っている諸先生の講演を拝聴するために何度か参加しました。諸先生のような独創性に富む研究成果をだせるだろうか、創造的な研究を継続できるだろうか、若かったあのころ私に自信はなく、あるのは諸先生に対する尊敬と憧憬でした。

国際シンポジウムでの論文集も当時は紙媒体でした。論文原稿を写真で撮り、そのまま発行する形式でしたので、論文原稿をきれいに仕上げるように努めました。原稿を手動のタイプライターでパチパチ音を立てて打つのですが、打ち間違えると最初からやり直しです。消しゴムや特殊な液を使って修正すると、出来上がりが汚くなってしまうので打ち直しをする——苦労の連続でした。

しかし、今では、苦労をした分、論文1つ1つに対する思い入れが強くなっています。論文を読み返すと、論文を作成した当時の情景がよみがえります。特に、今とは違い、図を1つ作るにもペン書きであったため苦勞しましたが、達成感は一入でした。このような紙媒体特有の思い出があるため、私は紙媒体論文に愛着を感じています。

現在、多くの国際シンポジウムの論文集は、USBスティックで配布されています。1000件以上のシンポジウム論文が小指サイズのたった1本のUSBスティックの中にあるのです。1冊3cmほどの厚みの論文集を5冊もかかえて——

なんと重かったことか——日本にもどっていた私を、皆様は、とくに若い皆様は想像できるでしょうか。時代は変わりました。

学会の数、国際シンポジウムが増えました。これにともない、電子媒体による論文公開も指数関数的に増加しました。グーテンベルグが発明した大量印刷技術、これを起点とした紙媒体による刊行は、今、電子媒体に追い越されようとしています。確かに、電子媒体は合理的で近代的でスピーディです。しかし、紙媒体の論文集には、電子媒体にはない暖かな手触り感、安心感、そして存在感があります。そう感じるのは71歳を迎えようとしている老いた私だけでしょうか。

小金井論集のサイズは、大きくも小さくもなく、ちょうど読みやすいサイズになっており、私はこの小金井論集に『知』の香りを感じています。将来、電子媒体主体になっていくのかもしれませんが、それまでは紙媒体での掲載論文の主張を、時間をかけてじっくりと理解しようと思っています。

2016年1月10日